

ああビルマ戦の悲劇

福井県 牧野 元

私の住む鯖江市はメガネの縁作り日本一の街です。その鯖江市で料理屋を営む牧野家の三男として、大正十四（一九二五）年九月十日に生を享けました。男三人女三人の六人兄弟で、鯖江市の惜陰尋常小学校で教育を受けました。昭和六年（一九三一）九月十八日、勃発しました満州事変は支那の上海まで飛火して上海事変となり、世の中が騒々しくなり、この世情は小学生の幼心にも残っております。

昭和十二年七月七日、支那事変が勃発し、世の騒ぎはいよいよ大きくなりました。出征軍人を見送るのに国防婦人会や小学生まで、日の丸の小旗を持って万歳々々で見送りするようになりました。

昭和十五年二月十一日の紀元節には紀元二六〇〇年を迎え、日本国中が「紀元は二六〇〇年」の

歌で盛り上がり、「八紘一宇」のスローガンを掲げ、戦争への道突進して行くような気がしてなりません。私は小学校を卒業し家業の手伝いをしておりますと、白紙の徴用令が来て名古屋市の三菱発動機工場で働くことになりました。若者達は軍隊へ志願するか、軍需工場で働くか、という時節でした。

二年間、三菱発動機で働き、その任務を終えて故郷へ帰る時、私は両手に衣服と食糧を提げて名古屋駅に来ました。衣服類は手荷物で送り、食糧だけを椅子に置き中央線に乗車しようと待っていますと、人に押されてそのまま乗車してしまいました。

発車してからベンチに置いた食糧を忘れたことに気付き、慌てて途中から名古屋駅に引き返すことにしました。果してあの食糧がベンチに残っているだろうかと心配しながら名古屋駅で下車して急ぎました。ベンチにそのまま残っております。

「よかった」なんとすばらしい国であろうかと、日

本の社会の良さを改めて痛感し、この立派な日本を守るために軍隊に志願しようとした。結果は見事甲種合格となりました。これで両親もそれではと認めてくれ、私も嬉しく思いました。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発し、連戦連勝のニューズが軍艦マーチと共にラジオから流れてますと、血湧き肉踊り、自分も軍隊にと考えていました。しかし料理屋家業のことを考えますとなかなか言い出すことが出来ず、思い切つて相談したこともありましたが駄目でした。軍需工場で働いたことから一層その気持ちが強くなりましたので、黙って徴兵検査を受けようと思いましたが。

当時は出征兵士を送り出すことは家門の名誉といわれる時代で、あちこちで赤紙召集による出征兵士を送る家が多くなりました。それで両親も私の軍隊志願について、いつまでも強くは反対はしませんでした。

昭和十七年九月、徴兵検査の人々に交じって志願者二人も身体検査を受けました。結果は見事甲種合格となりました。これで両親もそれではと認めてくれ、私も嬉しく思いました。

昭和十七年の暮れから十八年の初めにかけて戦局は連合軍の反撃が強くなり、日本軍には厳しくなりつつあり、一日も早く軍隊に入隊し御国のためにお役に立ちたい気持ちでいっぱいでした。「四月十日敦賀市の中部第三十六部隊に入営せよ」との赤紙を受け取った時は「いよいよ来たぞ」と嬉しく思い、十九歳で日本軍人になれる「やるぞ」と心の中に誓いました。四月十日、鯖江駅から出征する人は八人でした。

多くの人達が「万歳！々々」で日の丸の旗を振って見送って下さる姿に、若い私は感激と嬉しさでいっぱいでした。その反面、涙一つ出さず送ってくれる両親と家族のことを考えますと、二度と両親に会えることが出来るだろうか、知らず知らずに涙が頬を濡らしました。

入隊してからの三カ月の内務班の教育と訓練は
厳しい毎日でした。覚悟はしてましたが、古兵の
しごきには涙の出ることもありましたが。とくに歩
兵部隊でしたから朝六時の起床から夜九時三分
の就寝まで、忙しいこと。練兵場での訓練は歩く
こと、野外訓練では駆足行軍、帰れば装具の手入
れ、夕食の準備、食器返納、兵器の手入れ、古兵
のお世話、入浴、点呼の時の軍人勅諭の奉唱、叱
られ叩かれ、消灯ラッパが「初年兵は可哀相だな、
寝てまた泣くのかなあ」と聞こえるようでした。

私は下士官候補を志願しましたが、三カ月間は
皆と同じ訓練で鍛えられました。士官学校出身の
若手少尉が教育係で厳しい人でした。

小浜市の千本川原という松原で飯盒炊事の訓練
等が行われました。行軍して営門近く百メートル付
近になると「駆足」号令がかかり、やっとな営門の
前まで来ると、「回れ右」でまた後へ引き返し、さ
らに駆足行軍になり、夕食前の空腹での駆足行軍
の辛さは今でも忘れ得ません。それでも十九歳の

若さでしたから、他の人ほどは疲れを感じません
でした。

班長が大野郡の出身者であり、若い私を大変可
愛がって下さり助かりました。一期の検閲が終わ
りますと南方への移動を命ぜられ、約四百人、敦
賀駅から軍用列車で呉駅に向いました。いよいよ
南方の第一線かと心が弾みました。呉軍港から南
方へ向う連合艦隊の軍艦に便乗することになりま
した。

四月中旬、山本連合艦隊司令長官が戦死された
後だけに、呉港の出發に際しては空海両面から厳
重な防備を整えての出港のようでも連合艦隊の素晴
らしい出撃出港でした。この時点では戦艦「大和」
も「武蔵」も健在で威風堂々の南方への進撃でし
た。

そして米潜水艦を警戒するため時折日本軍の航
空機が上空を飛んでおりましたが、敵潜水艦の攻
撃を受けることなく、マレー半島のマラッカ港に
入港したのは一週間を経た七月の下旬でした。

この地は昭和十七年一月中旬、日本軍の攻撃で陥落したと聞きました。トラックに乗車しジョホールバルを通過し、シンガポールに到着しました。シンガポールは暑く、我々はブキテマ高地の英軍の兵舎に入り、一カ月間シンガポールの駅前の港の警備に就きました。立派な港で入港出港も盛んでした。

このシンガポールは昭和十七年二月十一日の紀元節の日に陥落し日本国内では万歳々と騒いだことを思い出し、シンガポールを占領するため日本軍の兵隊達の血がどれほど流れたであろうかと、シンガポールの美しい街を眺め感無量でした。山下奉文閣下が英軍のパーシバル司令官に「イエス」か「ノー」かと降伏を迫った、あのブキテマ高原にある英軍宿舎跡での一カ月間は、港の警備をしながらも少しゆっくりにすることが出来ました。

私達の部隊は安兵団第一〇〇二〇部隊に編成され、私は第三大隊第九中隊に編入になりました。八月、英国領土から独立宣言したビルマに移動す

るため軍用列車で「タイ」に入り、ナコーンナヨックに到着しました。

ここナコーンナヨックは泰緬鉄道の発着する重要な場所で、ここで一日列車の整備をしました。

この列車は薪を燃やして走り、速度ものろのろ運転でした。ビルマは独立したとは言え英国軍の反撃が強く、ビルマ全土で日本軍と英国軍との交戦が続いている模様でした。

泰緬鉄道を利用してビルマ入りした私達を待っているのは大雨でした。ビルマ地方には雨期と乾期があり、十月ごろから乾期となります。列車走行中、無蓋車に乗っている私達を目標にグラマン戦闘機が襲いかかり、列車をストップさせて列車の下にかくれました。「ダダダ」と機銃掃射の物凄いこと。驚きましたのは前方からばかりと思っていきました機銃掃射が、後方からも射撃出来るということでした。前方後方からの機銃掃射に負傷者も出た様子でした。

目的地に到着しても宿舎があるではなし野宿で

す。草原にごろ寝の生活が始まりました。制空権を握られたビルマでは至る所でグラマンの襲撃を受けました。民家は人が逃げてしまつて誰もおりませんので食糧は無断で頂きました。

日付と場所は忘れましたが転進する先々で英国軍と交戦の連続でした。幸い方々に野戦病院があり、負傷者は近くの野戦病院に収容します。戦死者は移動中でもあり、火葬では煙によつて我が軍の所在が分かりますので穴を掘つて土葬でした。

昼間の行軍は敵に発見されるので、ジャングルの中に隠れ、夜は街の名前も分らずただ進め進めの夜行軍でした。バナナやマンゴ、椰子の実など食べられる物を採り、補給は徴発した物で間に合わせねばなりませんでした。

目的地、中国の雲南省からビルマの国境沿いに物資を転送するルートへの遮断ですので、奥地へ奥地へと戦火を交えながらの転進で、心身共に疲れる大変な追撃でした。また蚊が多く、マラリア病になる人や、生水は飲めないので濾すか沸かして

飲めと厳命されていますが、暑いのでつい生水を飲む。その結果、アミーバ赤痢、併せてチフスに罹る者も多く、戦争による負傷者よりも病人が多くなる状態でした。

日本の空軍機は一回高く飛んでいるのを見ただけで、全く見ることはありませんでした。制空権を確保している米軍機は、我が物顔に空から襲いますが、対空砲火も見られず、まことに憐れな戦争でした。

私もメイミヨウの野戦病院に、マラリアに罹つて入院しました。まさに命拾いの入院でした。この野戦病院は高等学校のような建物を利用しておりましたが、九州と和歌山県の日赤救護班がいて、看護婦さんの姿を見た時大変心強く思いました。

二階の窓ガラスは破損していましたが、グラマン戦闘機は野戦病院と明示してあるのに機銃掃射で襲ってくるのに腹が立ちました。「何て卑怯なことをするのか」と入院患者一同怒りました。

我が軍はマンダレーを避けて通り、サガイン方

面に進撃しました。敵軍は空からの空軍機で、地上ではM3、M4の重戦車で歩兵と共に突撃して来るので手の打ちようありません。残念無念といいながら正月も何もなく毎日が戦争でした。

米、英、中国の三国の軍は中国の雲南省とインドアッサム州を結ぶ輸送路再開のため、昭和十八年十月から北部国境を越えて追撃を開始、中国雲南省からは中国軍がサルウィン河を渡って東北部からビルマ領に進撃して来ました。このため雲南省の守備についていた日本軍も一部撤退し、ビルマに進攻している日本軍と合同、一部は拉孟方面で連合軍と激戦の末全滅したとのことでした。

連合軍に対抗し昭和十九年三月、日本軍はチンドウイン河を渡り、インパール作戦が開始されました。世にいう悲劇のインパール作戦です。我が部隊はインパール作戦で激戦中の日本軍を援助するため中国雲南省からの連合軍側の輸送路を遮断する目的で、サガインまで進行して来ましたが、敵軍の物量の前には手も足も出ませんでした。

サガインの兵站病院には、インパール戦線からの傷病兵も続々と収容され、中にはやつとたどりつきながら力尽きて死亡する者も数多くあったと聞きました。サガインからインパールに通ずる道を靖国街道と名付けられていましたのも、インパール作戦がいかに厳しい戦争であったかを物語っているようでした。

昭和二十年三月十日、十一日のメイクテイラ(マングレの北部)の激戦では、季節的に雑草は枯れ身を隠す場所もない原野で、敵軍は砲兵隊に守られたM4戦車二十数両が我が軍の陣地を蹂躪し、その上、敵空軍機が銃撃爆弾を繰り返し、物量を誇る機動力の前にはどうにも出来ず、三月十日第五十六連隊の第一大隊は全滅し、十一日には藤村連隊の主力である山砲連隊も壊滅的打撃を受け、たった二日間で兵力は三分の一になったと聞きました。

そしてインパール方面からの情報も我が軍苦戦という情報ばかりでした。弾薬の補給なし、食糧

の補給なし、ビルマ各地でも、連合軍の強力な兵力と物量に苦戦、全滅という悲惨な状況のようでした。

昭和十九年七月にはインパール作戦も中止となり、ビルマ領に撤退して来ました。参戦された方の話しでは、まさに悲劇の敗戦だった。武器、弾薬、食糧ほとんど補給のないまま肉弾戦により損害も大きく、有力な九州の部隊もほとんど全滅したとのことでした。

折から雨期に入り河川は氾濫し、長期の行軍と飢餓で体力は衰え、途中で折れ重なって倒れ、河川や密林は日本兵の死体で埋まったともいわれ、惨澹たる作戦であったとのことでした。

敗退した牟田口兵団の戦力を補充するためミートキナ飛行場の守備をしていた私たちは命令によりクレ高原へ移動し、クレ高原の作戦に参戦させられました。インパールから撤退して来た年、田口兵団の参謀が「運命なり」と、第一一九連隊に酷命を押しつけ、このため我が軍は壊滅状態にな

りました。連隊長は酷命と知りながら引き受けて自決されたということで気の毒な最期でした。

一連隊四百人足らずの兵力で、敵の戦車旅団を共にする一個師団一万五千人の大軍に対して、クレ部落一帯を死守せよとの過酷な運命を連隊長は無理だと遠回しに回答されたそうですが、その意味を十分理解されたのかどうか？連隊長は無謀で無策かつ過酷な上層部の命令であることを百も承知の上で、全滅覚悟の上での激戦を行い自決されたと多くの人は語られました。私達の第三大隊も壊滅状態で、中隊長をはじめ多くの戦友が戦死され残念の極みでした。各中隊の残った兵は僅かな人数で悲惨なものでした。この激戦が私にとって最後の戦闘になりました。

各地の戦地で英軍側にはグラマン機が援助物資を投下します。その物資に色が付いていて、赤は弾薬、黄は薬品、白は食糧とのことで、食糧補給もない私達はうらやましく思いました。時折間違つて白の食糧が我が陣地にも落下してきました。

食事がまあまあ食べられること、水も消毒した水が飲めるということではほとんど病人らしい病人も出なかったようでした。

気持ちがあゆつくりしますと思いつくことは、敗戦後の日本はどうなっているだろうか、故郷の人々はどうしているだろうか、望郷の念に駆られることでした。終戦になったとはいえ階級章を付けたままの軍隊生活でしたが、夜はパイを作ってマージャンを楽しむ者や、役者経験者もいてみんなを楽しませてくれました。

昭和二十一年の八月になりますと、日本に帰れると誰からともなく話が出て来ました。それが事実となった時は嬉しかったです。日本に帰れる我が家に帰れるとみんなが喜びました。

八月十五日、バンコックのはずれの港からLS Tに乗って沖に停泊している日本からの迎えの「英彦丸」に乗船しました。船の中では帰ってからの仕事の話や、嫁の話等で毎夜にぎやかでした。台湾の近くを通る時、緑の森を眺め感慨無量でし

た。生きて帰れる喜びと共に頭の中をよぎるものは、我が子、我が夫を戦死させられた御遺族の思いで、火葬も出来ず穴を掘って土葬した人達の骨すら持ち帰りが出来なかったことを考えますと、言葉にはいいようがない思いました。

バンコックを出港してから約十日八月二十五日「英彦丸」は浦賀港に入港しました。検疫をすませて上陸、「日本の土が踏める」その喜びは言葉ではいい尽せない感激でした。海軍の砲術学校で一泊して、兵役解除を申し渡され、再会を約束してそれぞれの故郷へと出発しました。

私は鯖江までの切符を頂き、東京の上野駅から信越線で鯖江駅に降り立ちました。嬉しかった、やっと帰れた、三年振りに音信不通のまま自宅に帰りますと、私の元気な姿を見て家族一同びっくりして涙を流し喜んでくれました。仏壇に手を合わせ私を守って下さった御先祖に心からのお礼を申しました。併せて口惜しくありませんが、人間が人間を殺し合う戦争を二度と起してはならない

と誓いました。そして家が料理屋でしたから私は料理人として手伝いをするのが出来ました。ビルマで戦死した思いで家業の振興と祖国の再建に徹力を尽しました。

二年前、京都にビルマの舞踊団が来ましたので、せめても戦時中のことをお詫びしたいと思い、ビルマの若い人達に「戦争中ビルマの人達に大変ご迷惑をおかけしました」と申しました。年齢的にご理解頂けたかどうか分かりませんが、長い間の胸のしこりが流れたようでほっとしました。それにつけても無茶なビルマの戦争で、まさに「ああビルマ戦の悲劇」であったと、返す返すも残念に思います。

大東亜戦争従軍記

愛媛県 八和田 勲

私は大正七（一九一八）年生れです。当時は男子二十歳になりますと徴兵検査を受けなければなりませんでした。私は第一乙種合格でした。甲種合格は現役兵として入隊、二年間の軍隊教育を受けるのです。当時は国民すべてに課せられた義務でした。私は第一乙種合格ですから現役兵としての入隊の義務はありませんが第一補充兵として臨時教育召集を受け、昭和十四（一九三九）年三月八日輜重兵として第十一連隊に入隊、初めて軍人生活を体験する毎日が始まりました。

初めは基本的な徒歩教練や集団の行動等でした。朝の起床ラッパから夜の消灯ラッパまでの時間が長く感じられ、一日の時間を過ごすのも大変でした。規則正しい型にはまった毎日の教育は初めて体験することばかりです。何事も班の全員が出来